イーザーにおける「相互−作用美学」

——テクストと読者の「相互作用」の根拠としての「空所」と「否定」——

大石昌史

序

本論考は、ヴォルフガング・イーザー（Wolfgang Iser）の『読書という行為［行為としての読書］（"Der Akt des Lesens"（1976, 1984（2）））』(1)を対象として、彼の「作用美学（Wirkungsästhetik）」を享受者による創造的な「美的経験（ästhetische Erfahrung）」の理論として検討しようとする試みである。その際、考察の中心となるのが、イーザーによってテクストと読者の「相互作用（Interaktion）」の根拠とされる（「空所（Leerstelle）」と「否定（Negation）」を契機とした）テクストの「否定性（Negativität）」である。論述の構成は、第1節においてイーザーの基本的な立場を、第2節において彼の「空所」ならびに「否定」という概念を、そして、第3節において彼の考える「美的経験」の理論を検討するという形をとる。

1　作用美学

1・1　受用美学と作用美学

イーザーは、コンスタンツ大学の僚友であるヤウス（Hans Robert Jauß）と並んで「受用美学（Rezeptionsästhetik）」[2]の代表的な理論家と見なされているが、彼自身は、テクストがいかに「受用」されたかよりも、むしろ様々な「受用」を可能にするテクストの側の根拠を探求する自らの立場を「作用美学」と規定している。彼は、「受用美学」と「作用美学」の関係、あるいは、広義の「受用美学」における、読者による「受用（Rezeption）」（狭義）とテクストの読者に及ぼす「作用（Wirkung）」との関係を以下のように述べている。

「厳密な意味での受用は、記録されたテクスト消費［加工］（Textverarbeitung）の現象に注目し、従って、［読者の］態度（Einstellung）や反応（Reaktion）がテクストの受容［解釈］（Aufnahme）の限定要因となっていることを示している［読者の］証言（Zeugnis）に、強く、結びつけられている。しかし、テクスト自身は、同時に、『受用の予示［先与］（Rezeptionsvorgabe）』であり、それ故、潜在的［可能的］作用態（Wirkungspotential）であり、その構造が、消費［加工］を引き起こし、またある程度までそれを制御（kontrollieren）している。

それ故、作用と受用は、受用美学の研究の中心的な出発点であり、受用美学は、その目標とする方向に応じて、そのつど、歴史的—社会学的（受用）、または、テクスト理論的（作用）な方法をとる。受用美学は、これら二つの異なった方向の目標が相互に関係づけられる時に、十全たるものとなる。」（Vorwort（2 Auf.）S.I）

「作用美学」を主張するイーザーの関心は、「テクスト外の世界」に位置し、「歴史的に拘束」されている読者によるテクストの「受用史（Rezeptionsgeschichte）」ではなく、読者による「テクスト消費［加工］」——それは一つの「出来事（Geschehen, Ereignis）」と考えられる——の「過程（Prozeß）」、及び、それと相関関係にある、様々な「消費［加工］」を可能にする根拠となるテクストの「構造（Struktur）」にある。そして、彼が問題とする「読書」によって読み取られる「意味（Sinn）」とは、従来の文芸批評が問題としてきたような「論証的（diskursiv）」

な操作を経て確定されたテクストの「意味」、即ち、「解釈」の「結果（Resultat）」ではなく、テクストがその「美的（ästhetisch）」な「作用」を及ぼしている限りで、読み取られつつある「潜在的［可能的］意味（Sinnpotential）」（cf. S.42）、即ち、「読書過程（Lesevorgang）」において「出来事」として「生起（geschehen）」しつつある「意味」なのである。(3) また、このような「出来事」としての「意味の遂行（Sinnvollzug）」（cf. S.50）あるいは「意味構成（Sinnkonstitution）」（cf. S.42）は、読者による恣意的な行為ではなく、テクストによって「制御」されているが故に、そのテクストの「構造」も合わせて問題にされなければならない。それ故、彼は、自らの「作用美学」の課題を、「文学的テクストは、どの程度まで出来事として究明され得るか」（S.Ⅳ）、そして、「テクストによって引き起こされる消費は、どの程度までテクストに前もって構造化されているか」（ibid.）という二つの問いの解明であるとしている。

1・2　相互作用

イーザーは、言わば「可能態」としてのテクストは、読者の「具体化（Konkretisation）」行為（テクストによって「描写」される「対象」、また、その「意味」の読者による「具体的」な「構成」）を待って初めて、また、その「具体化」の「過程」においてのみ、「現実態」としての「文学作品（das literalische Werk）」となると考えている（cf. S.38）。それ故、このような状況の解明には、「テクストの形態」だけでなく享受者による「理解の行為」も同様に考察の対象とする「現象学的芸術理論」（典型的にはインガルデンの理論）(4) が相応しいものとされる（ibid.）。しかし、イーザーは、その「具体化」の「相互作用」性（「出来事」性）を主張することによって、インガルデンの「具体化」、並びに、その根拠となる「不確定［無規定］箇所（Unbestimmtheitsstelle）」概念を批判する。

「［インガルデンにおいては、］具体化は、作品の潜在的［可能的］（potentiell）要素を現実化（Akutualisierung）することに過ぎず、テクストと読者の相互作用ではない。それ故、不確定［無規定］箇所（Unbestimmtheits-stelle）は、結局、非動的（undynamisch）なものである補完（Komplettierung）を示唆する刺激（Suggestions-reiz）に過ぎず、読者によって規定されるべき、様々な図式化された象面（schematisierte Ansicht）ないしはテクストに表現されている遠近法［見方］（Darstellungsperspektive）の間の相関関係（Wechselbeziehung）に対する条件（Bedingung）ではない。」（S.279f.）

インガルデンは、テクストにおける「不確定［無規定］箇所」を、現実の「対象」に比して何らかの要素が「欠如」していることを示すものとして、テクストの外にある読者による「補完」を待つものとしてしか見なしていない、とイーザーは批判する。このように、「読者の役割（Leserrolle）」[5]をテクストに「欠如」しているものの「補完」と考えているが故に、インガルデンは、「正しい［適切な］（richtig）具体化」とそうでない［逸脱した］「具体化」とがあると主張するのである[6]が、これは、「読書」を、「正しい」か否かが問えない「出来事」というよりは、むしろ「判断」に近づけることになろう。また、このような「欠如」した要素の「補完」が持つ消極性は、インガルデンが、テクストには示されていない、登場人物の「髪の毛」や「眼」の「色」（その人物の本質的な構成要素とは考えられない）を思い描くことを「具体化」の例として好んで取り上げていることにも表れている[7]。しかし、イーザーが考えているテクストにおける「不確定箇所」（「空所」）は、「確定箇所」相互の「関係」の「欠如」であり、それを契機として読者がテクストの内に「巻き込ま（verstricken;involve［英語版］）」れ、断片的に呈示されている「図式化された象面（「対象の一つの「（現）象面［局相］（Ansicht）」」に対する「図式（Schema）」」）[8]や「遠近法（テクスト内の事柄に対する「登場人物」や「語り手」の「見方［立場］」）」相互の「関係」を自ら生み出すこと、即ち、「読書」を新たなものが「生起」する「出来事」たらしめることを余儀なくさせる「条件」なの

である。

イーザーによれば、「読書」とは、単にテクストに導かれる活動に留らず、「読書過程」において、読者自身が生み出したものからも影響を受ける活動であり、それ故、「不確定的（unbestimmt）」なテクストの有する「作用」は、読者によるテクストの「具体化〔現実化〕」のみならず、「具体化」されたものの読者への「還流〔フィードバック〕（Rückkopperung）」をも引き起こすという双方向的な「作用」、即ち「相互作用」（cf.S.257, 341）[9]の契機となるものである。それ故、テクストは、そこに断片的に記述されている事柄（「空所」を含んでいたり、「否定」されていたりする事柄）から読者自らに「対象」――テクストによる単なる「描写対象」ではなく、それらの背後にあり、それらの「統合的（integriert）」な「意味」として読者自らが生み出す、言わば「意味対象」――の「構成」を強いるものとなる。その「対象」が、自ら「構成」したものであるが故に、読者の「慣習〔態度〕（Habitus）」（cf. S.341）への「還流〔フィードバック〕」を引き起こし、読者自らの姿をそこに見ることを可能ならしめるのであり、「読書行為」においては、読者がテクストを「具体化」するのみならず、言わば、テクストによって読者が「具体化」されるのである。

しかし、イーザーは、彼の主張する「相互作用」の根拠となるテクストの「不確定性（Unbestimmtheit）」に関しては、インガルデンの理論を踏襲している。

1・3　虚構テクストの不確定性

a　虚構テクストの機能

テクストが読者の「参加（Beteiligung）〔意味構成〕」を待って現実的な「作品（現実態）」となるのは、それ

が「描写」する「対象」が、「実在（real）」の「対象」のような「全面的な確定性（allseitige Bestimmtheit）」（cf. S.45）を有しておらず、そこには、「不確定的」な要素が存しているからである。しかし、その「不確定性」は、「虚構（fingieren）」されたテクストに、「コミュニケーション」の「機能（Funktion）」を付与するという点において積極的な意義を持つ。イーザーは、「虚構（Fiktion）（「虚構という行為」並びに「虚構されたテクスト」）」の意義について、以下のように述べている。

「虚構を所与性［現実に在ること］（Gegebenheitsweise）の観点から規定すれば、虚構は虚偽である（lügen）ということになる。しかし、虚構をコミュニケーションであるというその機能の観点から規定すれば、虚構とは、それによって作り出された［虚構された］現実［実在］（fingierte Realität）を解明（Aufschluß）するものとなるのである。」（S.282）

イーザーは、虚構テクストを「現実［実在］」と比較して「何であるか」、即ち、その「実体性［所与性］」においてではなく、それが「現実」とは異なった「いかなる働きをするか」、即ち、その「機能」において問題とする。虚構テクストの「機能」が、単なる「現実」の「再現」ではなく、どこにも実在しない「現実」を「虚構すること」によって読者に何ものかを「伝達（vermitteln）」することであり、さらに、その「伝達」が一方向的なものではなく、相互的な「コミュニケーション」、即ち、読者の「参加」を待つものであるが故に、虚構テクストの「不確定性」は、積極的な意義を有する。従って、「不確定性」は「除去（beseitigen）」（cf. S.272）されるべきものではなく、虚構テクストに不可欠の要素として、「読書行為」を個々の読者による個別的な「経験（Erfahrung）」たらしめる根拠となるのである。

b　不確定性の歴史的増加傾向

イーザーは、文学的テクストの「不確定性」は、十八世紀以来増加傾向にあるとする。それを示すために、彼が『読書という行為』において主として例に取り上げるのは、フィールディングの『ジョゼフ・アンドルーズ』(1742)ならびに『トム・ジョーンズ』(1749)、スターンの『トリストラム・シャンディ』(1767)、サッカレの『虚栄の市――主人公のいない小説――』(1848)、ジョイスの『ユリシーズ』(1922)、および、ベケット(特に作品を限らない)である。[10] 彼は、読者がテクストの中の誰の「遠近法[立場]」を自らのテクストに対する「視点(Blickpunkt)」として選択するかという観点から、以下のように、小説における「不確定性」(テクストの「意味」を「確定」する困難さ)の歴史的増大を説明している(cf. S.315~327)。

十八世紀においては、小説は、「主人公」を頂点とした「登場人物」のヒエラルキー構造を基本的に有していたが、既に、「作者」の分身(「内包された作者(implied author)」[11])としての「語り手」、並びに、テクストの中で「語り手」に語りかけられる「虚構の読者(Leserfiktion; fictious-reader)」[12]の登場によって、その内部の「遠近法」は、重層化し、複雑なものになってきている。十九世紀においては、「主人公のいない小説(A Novel without a Hero)」が現れ、「登場人物」それぞれの「遠近法」の均質化が生じ、また、特権的地位を失って「登場人物」の一人に堕し、小説を読む際のガイドの役割を果さない「語り手(「信頼できない語り手(unreliable narrator)」[11])」が登場してきた。さらに、二十世紀になると、読者に「視点」を提供する従来のような「語り手」が存在せず、テクストの中の誰の「遠近法」に立ってそれを読めばよいのかわからない小説が現れてきた(所謂「作者の死」という状況の出現)。そうなると、読者は、テクストに対する「視点」を、「読書過程」において、自ら形成していかなければならないのである。

イーザーは、小説の十八世紀以来の歴史的展開において、以上のような「不確定性」の増加傾向が認められるが故に、虚構テクストの「不確定性」を主題的に扱う新たな文芸理論もしくは美学が必要であると考え、それを、

「作用美学」として呈示するのである。その際、先行するインガルデンの理論に対しては、「不確定性」を有するテクストと読者によるその「具体化」という枠組みは継承しながら、「不確定性」および「具体化」の内実において、独自の見解を示している。インガルデンの「具体化」に対するイーザーの「相互作用」の主張については、既に検討したが、イーザーによって「不確定性」の中心的な構造とされる「空所」と「否定」については、次節において検討する。しかし、ここで指摘しておかなければならないのは、「作用美学」を主張するイーザーの関心が、時を経るごとに増加してきた「不確定性」、特に、二十世紀のジョイスやベケットの作品に見られる「不確定性」にあり、また、彼らの作品を読む際に読者によって「経験」されるものの解明にあるということである。[13] イーザーが、インガルデンの「不確定箇所」ならびに「具体化」概念を批判するのは、まさに、それらの概念を以てしては、ジョイスやベケットの作品およびその読解が十分には説明できないというところにある。彼らの作品を読むことは、テクストの「描写対象」に対して「欠如」しているものを「補完」したり、「潜在的」なものを「現実化」したりすることではない。それは、読者が、テクストの中に「巻き込ま」れ、テクストとの「動的」な「相互作用」において、自ら「意味対象」を「構成」していくことなのである。これに対して、文学作品を論じながら、その関心は、「観念論―実在論（Idalismus－Realismus）」の二元的対立の文脈において媒介的な「純粋志向的対象（der rein intentionale Gegenstand）」の存在を示すというより広範な哲学的問題の解明にあったインガルデンにとっては、[14] ジョイスやベケットの作品は、彼の「調和（Harmonie）」的な文学観において典型的と見なされる小説に対する、[15] 特殊な例に過ぎなかったと言える。

2 空所と否定

2・1 空 所

a 空 所

イーザーは、虚構テクストの「不確定性」（彼は、それを『読書という行為』の最後の節において「否定性（Negativität）」と規定するのであるが）の一つの契機である「空所（Leerstelle）」について以下のように述べている。

「空所は、［不確定箇所が指示している］補完（Komplettierung）の必要性の代わりに結合（Kombination）の必要性を指示している。何故なら、テクスト［内に示されている対象］の図式が相互に関係づけられる時に初めて、想像的な対象（der imaginäre Gegenstand）が形成され始めるのであり、読者に要求されるこのような操作は、空所を中心的な解放の契機（Auslösemoment）とする。空所を通じて、テクスト内で空白とされている（ausgespart）セグメント間の結合［接続］の可能性（Anschließbarkeit）が示されて（signalisiert）いるのである。」(S.284)

インガルデンの「不確定［無規定］箇所」とは異なる、イーザーの言う「空所」は、テクストの「セグメント［部分］」相互の断絶を指しており、それは、読者に断片的な「セグメント」を「結合」し、「想像的な対象［意味対象］」を「構成」するよう要請するものである。このように、彼は、「空所」を、要素間の「関係性」の「欠如」を通じて「統合的」な「対象」の「構成」を要請するものと規定することによって、そこには、「断絶」と同時に「結合の可能性」が示されているとする。しかし、ここで言う「結合の可能性」とは、「結合」の「不在」を、即ち、前後のテクスト（「確定的」な「セグメント」）に「制御」されてはいるが、「結合」そのものは読者に委ねられていることを意味している。

読者による「結合」とは、断片的、対立的に併置されたテクストの「セグメント（「対象」に対する「図式」）」を「統合的な形態（integrierte Gestalt）」あるいは「想像的な対象」へとまとめ上げることであり、それは、「想像［表象］活動（Vorstellungstätigkeit）」（cf. S.288）、即ち、「像［イメージ］形成（Vorstellungsbildung；image-building）活動」によって果される。そして、この「活動」は、テクストの内に次なる「空所」が見出される度に繰り返され、そのつど、新たな「イメージ［像］（Vorstellung, Bild；image）」が生み出される。その際、読者は、自らが生み出した以前の「イメージ［像］」に「反応（reagieren）」（cf. S.289, 292）し、ここにおいて、「独特な、テクストに導かれた、読者の想像の［読者によって生み出されたイメージ［像］の間の］相互作用（Interaktion seiner Vorstellungen）」（S.292）が始まるのである。従って、テクストと読者の「相互作用」において、厳密な意味で、同一の地平において「相互」に「作用」を及ぼし合うのは、所与のテクストと読者の間ではなく――何故なら、読者によってテクストそのものを変更することはできないのだから――、読者自らが生み出した「イメージ［像］」とそれに「反応」し、また新たな「イメージ［像］」を生み出していく読者の間ということになる。その時、テクストは、「相互作用」としての読者の「想像［像形成］活動」のための、「空所」を宿した「場（Feld）」となるのである。

b　空所の機能

イーザーは、テクストのセグメント間の「結合」を妨げると同時にその「条件」ともなる「空所」が、「相互作用」の過程において果す「機能」を、以下のような三項目に分けて説明している。

①「空所」は、「結合」の「欠如」であるが故に、読者の「参加」を要請し、テクスト内に示されている「登場人物」や「語り手」の「視点［遠近法］」ではなく、その「読者の視点（Leserblickpunkt）」を、セグメントが、

相互に「投影（projektieren）［対照］」し合い、「［意味］規定」される「場」として成立させる。（cf. S.305）

②「空所」は、セグメント相互が「投影」し合い、「規定」し合った結果、相互を支える（対立する要素を包含する）共通の「枠組み（Rahmen）」として「機能」する。即ち、「空所」は、その存在を介して、読者に、対立するセグメント相互に共通する「枠組み」を想定させ、その結果、読者による「結合」の「条件」となる。（cf. S. 306）

③「主題―地平構造（Thema - und Horizontstruktur）」[16]によって「空所」を考えるならば、それは、「読者の視点」が移動するにつれて、先に「主題」とされていたセグメントが「地平」と化す「場」であり、ここにおいて、先のセグメントは、「地平」として、新たに「主題」化されるセグメントと同時に捉えられ、その新たな「主題」の理解を「制御［方向づけ］（konditionieren）」している。（cf. S.306f.）

以上のような「空所の機能」によって、読者は、自ら「想像的な対象」を「構成」していくのであるが、それを構成させるテクストの「否定性」の契機としては、さらに「否定」がある。[17]

2・2　否定

「空所」が、「テクスト」の、あるいは「読書［読み］」の「連辞（syntagmatisch）軸」における、即ち「結合（Kombination）関係」における「欠如」であるのに対して、「否定（Negation）」は、「範列（paradigmatisch）軸」における、即ち「選択（Selektion）関係」における「欠如」（真の「主題」は、テクストの内に「選択」され「明示（formulieren）」されてはいないこと）を示唆するものである（cf. S.328, 332）。

イーザーは、この「否定」には、テクスト内部での「第一の否定（primäre Negation）」（テクストの「主題」

が何であるかに関わる）と読者の立場での「第二の否定（sekundäre Negation）」（テクストが如何なる「機能」を果すかに関わる）とがあるとする。

「第一の否定は、否定行為の原因となる潜在的な主題（virtuell gebliebenes Thema）を浮かび上がらせる。従って、それは、とりわけ、テクスト外の世界からテクストの内へと取り入れられたレパートリー[18]に関連している。それ故、この否定の意義は、主題に関わるところにある。第二の否定は、読書において生み出された意味形態（Singgestalt）を読者の慣習［態度］（Habitus）へと還流［フィードバック］（Rückkoppelung）することが必要であることを示している。それは、テクストの意味構成（Sinnkonstitution）を慣習の定位［方向づけ］（Orientierung）へと転ずることにおいて有効となり、そして、この種の否定は、確かに、しばしば、読者の慣習の訂正（Korrektur）を引き起こし、読者は、異質の経験（fremde Erfahrung）を理解するようにならなければならない。それ故、この否定の意義は、機能に関わるところにある。」(S.341)

読者は、テクストの内に取り入れられた「既知」の事柄の様々な形での（「筋」の展開や「登場人物」の発言等によって示される）「否定」（「第一の否定」）によって現れてくるところの「未知」かつ「異質」な事柄（「潜在的な主題」）を、「虚構」された「テクスト世界」の内に見、それによって、自己自身の属する「現実の世界」に対する「慣習的な態度」の「訂正」（「第二の否定」）を余儀なくされる。何故なら、「読書行為」は、読者が占める場所を持たない「テクスト世界」を傍観者として眺めることではなく、読者自身を「巻き込む」一つの「出来事」ないしは「経験」であり、それによって、「主体」には何らかの変化が生じるからである。また、自己の「慣習」を「訂正」するということは、それによって「自己」自身に対面する（「自己」を「対象化」する）ということでもある。自らに馴染み深い「世界」に接している限りは、そこには何ら抵抗となるものがないが故に、「自己」を意識することはない。しかし、馴染み深い「既知」の「世界」が、たとえ「虚構テクスト」の中であっても、「否

定」される時、読者は、そこに抵抗を感じ、その「世界」に馴染んでいた「自己」を意識せざるを得ない。そして、テクストを読み進む限りは、「否定」によって「構成」を要請される「未知」かつ「異質」な事柄を許容すべく「自己」を、即ち、「世界」に対する「自己」の「慣習的な態度」を「訂正」して行かなければならないのである。

2・3　否定性

イーザーは、「空所」や「否定」によって、虚構テクストには独特な「否定性（Negativität）」が生じるとする。このテクストの「否定性」（「空所」や「否定」によって生じるテクストの「不確定性」）こそ、テクストと読者との間に「動的」な「相互作用」の関係を成立させるものなのである。彼は、以下のように述べている。

「空所と否定は、両者が、空白（Aussparung）と取り消し［止揚］（Aufhebung）を通じて、テクストにおけるほとんど全ての明示［明確な表現］（Formulierung）を明示されていない地平（unformulierter Horizont）に関係づけることによって、虚構テクストに独特な濃密化（Verdichtung）を生じさせる。そこから、明示されたテクストは明示されていないものによって二重化［裏打ち］（doppeln）されている、と言えよう。我々は、この二重性（Doppelung）を虚構テクストの否定性と名づける。」（S.348）

「空所」と「否定」は、テクストに「明示（formulieren）されたもの」の背後に、「明示されざるもの」（「想像的なるもの[19]」）の「地平」が存していること（「否定性」）を示している。また、逆から言えば、「明示されたもの」と「明示されざるもの」、あるいは「語られたもの（das Gesagte）」と「語られざるもの（das Nicht-Gesagte）」（cf. S.348）の「二重」構造は、テクストの「連辞軸における空所（結合的関係の欠如）」並びに「範列軸における否定（選択されざるものの主題化）」を二つの契機としているのである。このような、テクスト内に「明示され

たもの」が「明示されざるもの」を示すという、テクストの、言わば「自己否定性」こそ、読者自身に、「想像的」な「世界」を生み出すと同時に「自己」自身を「対象化」させ、「読書行為」を、「創造的」な「経験」（「美的経験」）たらしめるものなのである。

　そこで、次節においては、イーザーの「美的経験」及び、その構成要素となる「美的作用」並びに「美的対象」概念を考察し、彼の、言わば「相互－作用美学」とも呼び得る理論を総括的に検討してみたいと思う。

3　美的経験

3・1　美的作用

「出来事」としての「美的経験」は、あくまでテクストの「作用」を待って成立するものであり、その「作用」は、イーザーによれば、「語られたもの（das Gesagte）と意味されるもの（das Gemeinte）との差異（Differenz）」、換言すれば、表示と隠蔽との弁証法（Dialektik von Zeigen und Verschweigen）から生じる」（S.79）とされる。この「語られたもの」即ち「明示的（denotativ）」な意味と「意味されるもの［語られざる意味］」即ち「内含的（konnotativ）」な意味との「差異」は、「表示」されたものの背後に「隠蔽」されたものを持つというテクストの「否定性」を示すものであり、この「否定性」こそ、「読者」にテクストの「表示」と「隠蔽」の「弁証法」への「参加」、即ち「動的」、「生起」的な「出来事」としての「読解」を「呼びかけ（Appell）」[20]るものなのである。

　また、この「表示」と「隠蔽」との「弁証法」あるいは「相互作用」は、「論証的（diskursiv）」なテクストの持つ「静的」な「表示」もしくは「明示」ではなく、「美的（ästhetisch）」なテクストが持つ「動的」な「作用」

に基づくものであり、イーザーは、この「美的」な「作用」について以下のように述べている。

「美的作用の本質は、既存のもの（das Bestehende）に結び付けることができないところにある。……もしも美的作用によって意味されるものを既知の意味（Bedeutung）から決定しようとすれば、美的作用の独自性は失われてしまう。何故なら、美的作用は、それによって世界にもたらされるものを意味［指し示］（bedeuten）しており、それ故、美的作用［によって意味されるもの］は、世界の中に予在するもの（der vorhandene Bestand）と同一ではない（das Nicht-Identische）からである。けれども、……人は、この同定せざるもの［未知のもの］を把捉（begreifen）できるものへと還元（zurückbringen）したがるものである。しかし、その還元が起こると作用は消えてしまう。」(S.40f.)

従って、テクストの「作用」は、それが「作用」であるというその本質に基づいて考えるならば、読者による「論証的」な操作によって「既知」のものへと「還元」された「解釈」の「結果」によって捉えられるものではなく、「未知」のものを読者に生み出させつつある「過程」、即ち、他へと「還元」されない「美的」な「性質（Charakter）」を有している限りにおいて読者に「生起」しつつある「経験」（「美的経験」）によってのみ窺うことができるのである。

3・2　美的対象

a　美的対象

イーザーは、テクストの「美的作用」によって読者が生み出す「美的対象（der ästhetische Gegenstand）」について、以下のように述べている。

「美的対象性（Gegenständlichkeit）は、既存の図式（Schemata）の変形（Deformation）において、初めて、現れる。従って、美的対象は、図式の変化（Veränderung）における空白形式（Hohlform）として型取られる。そこから、美的対象とは、変形され、否定（dementieren）された図式の上に、読者によって生み出されなければならない想像［表象］対象（Vorstellungsgegenstand）であると言える。」(S.154)

現実世界の「コード（code）」によっては捉え尽くせない虚構テクストにおける「対象［意味対象］」、即ち、実在しない「美的対象（第二コード（Sekundärcode））」は、テクストの内には、既存の「対象［描写対象］」の「構成」を導く「図式（第一コード（Primärcode））」(cf.S.155f.)の「変形」によって生じる「空白形式」としてしか示されていない。それ故、「美的対象」とは、読者が、自らテクスト内の様々な「セグメント」を「結合」し、また、それらの「否定」を通じて、既存の「図式」の上に「想像［思い浮べ］（vorstellen）」しなければならないものである。また、このような「美的対象」は、「第二コード」としての「機能」を有するが故に、読者による「意味構成」を「制御［規制］」するものでもある。従って、「美的対象」は、「読書過程」において、「図式」としての「セグメント」に「制御」されつつ、また、逆に、それらの（「結合」や「否定」を通じての）「変形」を「制御」しながら「想像的」に「構成」されていく「意味対象（想像［表象］対象）」なのである。

b　イメージ

それでは、イーザーの語る「想像［表象］対象」もしくは「イメージ［像］（Bild）」とはいかなるものであるか、改めて検討してみよう。

「こうしたイメージの特性は、そこにおいて、対象の直接的な知覚（Wahrnehmen）においては生じ（sich einstellen）得ないような象面（Ansicht）が現れるところにある。従って、イメージを見る（Bildersehen）という

ことは、イメージの形をとって（in den Bildern）見えてくるものが実際には欠如していること［不在］（Abwesenheit）を前提としている。……虚構テクストの読解において、我々は、常にイメージ［表象］形成（Vorstellungen bilden）を行なわざるを得ない。何故なら、テクストの『図式化された象面』は、我々に、それを前提条件として想像的な対象が生み出されるところの知識（Wissen）しか提供しないからである。従って、表象のイメージ的性格（Bildcharakter der Vorstellung）は、提供された、ないしは、読者において呼び起こされた知識の利用（Nutzbarmachen）によって生じるのであり、即ち、知識そのものがイメージ化［表象］されるのではなく、提供されたデータの与えられていない結合［関係］（die nicht - gegebene Kombination）がイメージの形をとって現れるのである。」(S.221f.)

テクストの内に「選択」された「既知」のものではなく、そこに「欠如」している（「不在」の）もの、「否定的」に示されているもの、ないしは、「既知」のものの「結合」によって新たに生み出されるもの、即ち、端的に言えば、「未知」なるものは、「イメージ」の形をとってしか「表象［想像］」され得ない。この「表象［想像］」された「イメージ」は、「知覚されたイメージ（感覚像）」とは異なり、また、「知識」が「イメージ」化されるのでもない。あくまで、それは、「知覚（感覚）」と、「知識（概念）」の「（中）間（metaxu）」[21]にあるものであり、「読書過程」において、テクストがその「美的作用」を及ぼしている限りにおいて、読者に「表象［想像］」されているものに過ぎない。それを「概念的に把捉」しようとすれば、それは、もはや「イメージ」としての性格を失ってしまう。それ故、我々は、小説が劇化されたり映画化されたりして、「イメージ」として捉えられていたものが「知覚」の「対象」となった時にある種の違和感を覚え、また、小説を「論証的」な「意味」へと還元してしまう観念的な批評に対して貧しさを感じるのである。我々が、「読書過程」において、自ら生み出しつつ「経験」しているのは、このような「イメージ」としての「美的対象」なのである。

3・3　美的経験

テクストによって導かれた読者の「想像［イメージ形成］（Vorstellungsbildung）活動」において生じるテクストの「意味構成（Sinnkonstitution）」、即ち、「読書行為」は、「空白」から「対象」を生み出すものであるが故に、一種の「創造的行為（ein kreativer Akt）」（cf. S.231）である。イーザーは、「［芸術作品を］知覚（perceive）するためには、見る者は、自らの経験を創造（create）しなければならない」とするデューイの「芸術知覚」[22]、即ち、「美的経験（ästhetische Erfahrung）」に関する見解を肯定的に引用しながら（ibid.）、「読書行為」の「創造性」を主張する。

彼は、このような「経験」を「創造」するという「美的経験」の性格について、以下のように述べている。

「美的経験は、経験の獲得（Erfahrungserwerb）そのものを意識させ、経験の成立（Zustandekommen）は、常に、それが成立する条件に対する洞察（Einsicht）を伴っている。それによって、美的経験は、超越的な契機（ein transzendentales Moment）を得るのである。」（S.217）

「美的経験」は、新たな何ものかの「経験」に留まらず、「経験」の「成立」そのものを意識させるということにおいて、「経験」しながら、その「経験」されるものを「超越」するという特異な性格を持つものである。また、虚構テクストの「理解（Begreifen）」が、「受動的（passiv）な受け入れの過程」ではなく、テクストにおいて「経験」された旧来の経験との「差異（Differenz）」に対する読者による「生産的な応答（produktive Antwort）」（cf. S.218）、即ち、新たな「経験の獲得」への読者による積極的な「参加（Beteiligung）」であるが故に、イーザーは、この「超越的」な「美的経験」においては、新たな「経験」をしつつある読者の「自己」が「知覚」されるの

だと言う。

「参加の過程における自己を知覚できることが、美的経験の中心的な契機を成す。それは、人が自らの置かれている状況の内に自らを見るという独特な中間状態（Zwischenzustand）を呈するのである。」（S.218）

「美的経験」とは、単にテクストの内に「選択」された既存の様々な「世界観」（「遠近法」）を「経験」することではなく、それらを自ら「結合」もしくは「否定」し、新たな「対象」を生み出していく「創造的経験」なのであり、そこに生み出された「対象」は、テクストの「意味」であると同時に読者自身の姿なのである。読者は、この「中間的」で独特な「創造的経験」において、テクストを「超越」すると同時に「自己」を「対象化」するのであり、このような状況こそテクストと読者の「相互作用」なのである。それは、単にテクストの内なるものの「具体化」に留まらず、「空所」や「否定」を通じて示されるテクスト内に「欠如」したものを「想像的」に生み出し、その生み出されたものを「視点」としたテクスト内に「明示」されているものに対する「反応」なのである。それ故、そのような「読書行為」が、「既知」なる「世界」を「超越」した、「未知」なるものの「経験」という性格を持ち得るのであり、その際、読者は、テクストを「場」として「未知」なる「世界」を「創造」しつつ「経験」しているのである。

結び　「想像的なるもの」の地平

前節において、イーザーの語る「美的経験」の「創造性」、および、そこにおいて、「世界」と「自己」とが「経験」されるという構造を検討してきたのであるが、しかし、イーザー独自の主張は、テクストの「否定性」を介して、読者による「構成」が要請されるというものであった。そこで、「美的経験」としての「芸術知覚」一般にみ

られることよりは、むしろ「虚構（Fiktion）」に基づく芸術に典型的にみられる「意味構成」の要請に関する記述を検討し、本論考の結論としたい。

　イーザーによれば、「虚構テクスト」における「言語記号」（Sprachzeichen)」は、「明示的な記号使用（die denotierende Zeichenverwendung)」の場合と異なって、その「目的性（Finalität）」を逸脱して、「何か他のもの（etwas anderes)」へと「開かれて（sich öffnen)」いる（cf. S.230)。そして、このような「虚構テクスト」における「言語」の特性である「露呈する沈黙（enthüllendes Schweigen)」（「明示」し得ない「何ものか」を「露呈」することによって、自らが「明示的な記号」であることを放棄する［「沈黙」する］こと）(ibid.) は、「言語」においてはもはや「顕示（manifestieren）［明示］」され得ないものを「生み出す（hervorbringen)」が故に、「想像［表象］行為（Vorstellung）」においてしか存在し得ない（ibid.）のである。その「想像［表象］行為」において、読者は、作者による「虚構的」な「言語使用」（「虚構的なるもの（das Fiktive）」）に特徴的な「露呈」しながら「沈黙」するという「否定性」によって、「テクスト外の世界」と対応する「実在的なるもの（das Reale）」を「超越」し、「想像的なるもの（das Imaginäre）」[23]の「地平」において、「言語」を越えた「意味」［「語られざる意味」］（cf. S. 352f.）であるところの「美的対象［意味対象］」を自ら「構成」しながら「経験」するのである。

　このような「美的経験」は、いわば「無」の「否定的［ネガティブ］」な「現象」であるところの「否定性」を介した「創造的行為」であるが故に、独特な意味で「無からの創造」と呼び得るものであろう。しかし、その「創造」は、あくまで、自己以外のものを「否定的」に示すテクストを不可欠の相関者とする、テクストと読者の「相互作用」において「生起」するものなのである。

註解

（1）本論考におけるイーザー（Wolfgang Iser）のテクスト（『読書という行為［行為としての読書］── 美的作用理論 ── 』）の引用は、独語版（文献1）に基づいているが、その英語版（文献2）、翻訳版（文献3）も併せて参照した。英語版は、独語版に対して表現が改められたり、補足されたりしている箇所があるが、独語による最新の第二版（1984）の本文が、初版（1976）と同一であることから、独語版を基本的なテクストとした。なお、轡田氏による翻訳版は、独語版を基本とし、英語版を参照しながら、独自の解釈によって、補足、省略が行なわれている。

（2）"Rezeption；reception"の訳語として「受用」を用いたのは、「受容」は"acception"の訳としては適当であるが、"reception"については「受用」（かつて「享受」と同意に用いられた例もある）と訳すべきであるとする佐々木健一教授の指摘に従ったものである。
ところで、「受用美学」に関する論文の代表的なアンソロジーであるヴァーニング（Rainer Warning）の編集による『受用美学』（"Rezeptionsästhetik"（1975））の中には、『テクストの呼びかけ構造』（文献6）を始めとして、『読書という行為』の原型となったイーザーのいくつかの論考が収められている。
「受用美学」の全体的な紹介としては、ホルブ（Robert C. Holub）による『受用理論』（"Reception THEORY"（1984））（『［空白］を読む』鈴木聡訳　勁草書房（1986））がある。その中の「テクスト性と読者の反応」（原書 p.82〜106）は、イーザーを論じた節である。
英語圏での「受用美学」に対応する動きとしては、これは一つの学派をなすものとは言えないが、「読者反応批評（reader-response criticism）」と呼ばれる一群の「読者論」がある。イーザーの論文を含むそのアンソロジーとしては、『読者反応批評』（"Reader-Response Criticism" ed. by Jane P. Tompkins (1980)）や『テクストの中の読者』（"The Reader in the Text" ed. by Susan Suleiman and Inge Crosman (1980)）がある。なお、「読者反応批評」と「受用美学［受用理論］」の関係については、ホルブの『受用理論』（前掲）の序文（Preface）を参照のこと。

（3）『読書という行為』の中の、I・A・2　古典的解釈規範の影響（S.23〜37）、及び、II・A・1　読者に準拠した見方と伝統的な反論　の前半（S.37〜44）を参照のこと。

（4）インガルデンの文芸理論を示す主要な著作としては、『文学的芸術作品』（文献9）や『文学的芸術作品の認識』（文献10）

があるが、前者においては、文学作品の「多層的」構造が、後者においては、読者による「具体化」が、主として論じられている。なお、彼が、文学作品の「層（Schicht）」として上げるのは、①「語音(Wortlaut)」（言葉のもつ「音」）、②「意義統一（Bedeutungseinheit）」（単語、文、連関する複数の文の「意義［意味］」）、③「図式化された象面（schematisierte Ansicht）」（「図式」的に示されている「対象」の一つの「現象面」［一面的な「現れ」］）、④「描写された対象（dargestellter Gegenstand）」（様々な「象面」から構成される「描写対象」）の四つである。

(5) イーザーは、「テクストの内」に、自ら「意味構成」を行なうべく「構造化」されている「読者の役割」のことを、「内包された読者（der implizite Leser）」と呼ぶ。（『読書という行為』のⅠ・B・2　様々な読者概念と内包された読者という概念（bes. S. 59ff.）を参照。）

(6) インガルデンによる「正しい［適切な］具体化」の主張については、『文学的芸術作品の認識』（文献10）のS. 142, 156, 169ff., 178（イーザーが『読書という行為』のS. 269で注記している箇所）を参照。

(7) インガルデンが好んで上げる「具体化」の例については、『文学的芸術作品の認識』（文献10）のS. 49, 409を参照。

(8) 「図式化された象面」とは、「現実」に「知覚」される、「対象」の「具体的」な「（現）象面（Ansicht）」ではなく、その「象面」の「観念的」な「骨格（Skelett）」（「図式(Schema)」）である。（『文学的芸術作品』（文献9）のS. 279を参照。）

(9) 「読書過程」における「相互作用」の具体的な姿である「想像の相互作用」については、本論考の2・1・a　空所　を参照。

(10) イーザーは、著作『内包された読者』（文献4）において、これらの作家たちについて、それぞれ、「読者」、「虚構」あるいは「コミュニケーション」等に関する題のもとで、個別的な研究を行なっている。

(11) 「内包された作者」も「信頼できない語り手」も、ウェイン・ブース（Wayne C. Booth）の『虚構のレトリック』（“The Rhetoric of Fiction” (1961, 1983 (2)）の中で呈示されている概念である。

(12) 「虚構の読者」とは、「語り手」に語りかけられることによって、所謂「登場人物」たちとは異なったレベルにおいてではあるが、テクストに登場する「読者」のことである。

(13) イーザーは、彼の理論が、小説一般に通用することを示そうとしているが、インガルデンの理論に対する批判には、独自

の「作用美学［理論］」を主張する彼の動機が、「意味」を「確定」することが困難な今世紀の小説の解明にあることが窺われる。（『読書という行為』のⅣ・A・2　インガルデンの不確定［無規定］箇所の概念（bes. S. 269f., 275f.）を参照。）

(14)『文学的芸術作品』（文献9）の序文（Vorwort）S. Ⅻ f. を参照。

(15) インガルデンは、「多層的」構造を成す「文学作品」が「具体化」される理想的な姿を、「文学作品」が有する様々な「美的価値品質の多声的調和（polyphone Harmonie）」に見ている。（『文学的芸術作品』の第十五章（六八節）を参照。）

(16)『読書という行為』のⅡ・B・4　主題と地平の構造（S.161〜169）、及び、Ⅱ・B・5　主題―地平構造の諸様態（S.169〜174）を参照。

(17) イーザーは、「空所」を、「空白」と同義的に（広義）、また、「結合関係」の「欠如」として（狭義）、両義的に用いている。広義の「空所」は、「否定」によっても生じるとされるが、本論考においては、「空所」と「否定」という概念相互の関係を明確にするために、「空所」を狭い意味に限定し、両者を「否定性」の二つの契機と見なす。

(18) イーザーは、オースチン（J. L. Austin）の「言語［発話］行為論」を参考にしながら、テクストの「レパートリー［上演種目］」は、作者と読者に共通の「慣習［約束事］（Konvention）」を、また、テクストの「ストラテジー［戦略］」は、両者に承認された「手続き（Prozedur）」を指すものと規定する。（『読者という行為』のS.115を参照。）

(19)「想像的なるもの」については、本論考の　結び、並びに、註（23）を参照。

(20) イーザーの論文『テクストの呼びかけ構造』（文献6）の題にも取り入れられている、この「呼びかけ（Appel(1)」という概念は、サルトル（Jean-Paul Sartre）の『文学とは何か』（“Qu'est-ce que la littérature ?”）の中の用語であり、イーザーは、その文学観において、また、その「イメージ」の位置づけにおいて（サルトル『想像的なるもの』（“L'imaginaire”）参照）、サルトルから大きな影響を受けている。

(21) ミケル・デュフレンヌ（Mikel Dufrenne）の『美的経験の現象学』（“Phénoménologie de l'expérience esthétique”）の中のギリシア語の “μεταξύ” に由来する用語。

(22) デューイ（John Dewey）の『経験としての芸術』（“Art as Experience” Capricorn Books, New York（1958(12)））p. 54を参照。

（23）「虚構的なるもの」、「実在的なるもの」、そして、「想像的なるもの」とは、『文芸理論の現状』（文献7）、及び、より明確には『虚構という行為』（文献8）の中で、イーザーが、呈示している概念である。

文献

a　イーザー（Wolfgang Iser）の著作および論文

＊『読書という行為［行為としての読書］』

1　“Der Akt des Lesens — Theorie ästhetischer Wirkung — ” UTB 636, W.Fink, München（1976, 1984（2））
（＊第二版（1984）は、初版（1976）に対して『第二版のための序文（“Vorwort zur Zweiten Auflage”）』（S. I～VIII）が補われている。なお、この序文は、和訳（文献3）において、『日本語版への序文』として訳出されている。）

2　“The Act of Reading — A Theory of Aesthetic Response — ”Routledge & Kegan Paul, London and Henley（1978）

3　『行為としての読書 — 美的作用の理論 — 』轡田収訳　岩波現代選書（1982）
（＊文献1～3の諸版の関係については、註解（1）を参照のこと。）

＊『内包された読者』

4　“Der implizite Leser — Kommunikationsformen des Romans von Bunyan bis Beckett — ” UTB 163, W. Fink, München（1972）

5　“The Implied Reader — Patterns of Communication in Prose Fiction from Bunyan to Beckett — ” The Johns Hopkins University Press, Baltimore and London（1976）
（＊英語版（5）は、独語版（4）に対して、“The Reading Process : A Phenomenological Approach” が第11章として増補されている。）

＊その他

6　“Die Appellstruktur der Texte — Unbestimmtheit als Wirkungsbedingung literarischer Prosa — ” in “Konstanzer Universitätsreden 28”（1970, 1974（4））

（英語版 "Indeterminacy and the reader's response" in "Aspects of Narrative : Selected Papers from the English Institute" ed. by J. Hillis Miller, Columbia University Press, New York and London (1971) ）
（『作品の呼びかけ構造』轡田収訳、『思想』一九七二年九月号所収）
7 "The Current Situation of Literary Theory : Key Concepts and the Imaginary" in "New Literary History 11" (1979)
8 "Akte des Fingierens oder Was ist das Fiktive im fiktionalen Text ? " in "Funktion des Fiktiven" ("Poetik und Hermeneutik X") hrsg. von Dieter Henrich und Wolfgang Iser, W. Fink, München (1983)
（英語版 "Feigning in Fiction" in "Identity of the Literary Text" ed. by Mario J. Valdes and Owen Miller, University of Toronto Press, Tronto, Buffalo, London (1985) ）

b インガルデン（Roman Ingarden）の著作
＊『文学的芸術作品』
9 "Das literarische Kunstwerk" Max Niemeyer, Tübingen (1931, 1965(3))
（『文学的芸術作品』瀧内槙雄・細井雄介訳　勁草書房（1982））
＊『文学的芸術作品の認識』
10 "Vom Erkennen des literarischen Kunstwerks" Max Niemeyer, Tübingen (1968)
（ポーランド語版は1937年に出版）